

田中和男

夜、テレビを観ながら、父に昔のジャズバンドの話聞いた。先日あるオールドファンが持ってきてくれた、父の演奏を録音した古いジャズのレコードを聴いて刺激され、いろいろ尋ねたのだ。忘れないうちに書き留めておこう。

1911年(明治44年)兵庫県に生まれた父は、大正13年神戸の宮崎音楽学院に入学した。同期生にはドラムの加藤一男、飯山茂雄がいた。加藤一男の三月あとに父が入り、それから一月後に飯山茂雄が入ってきた。後に関東の田中和男、関西の飯山茂雄と言われるようになるのだが、飯山は負けん気の強い性格で、当時から父にたいして強いライバル意識を燃やしていたという。戦後、父が松竹軽音楽団のバンドマスターとして関西公演に行ったとき、飯山によって一夜のうちにメンバー全員が引き抜かれたという話は、角田晃一の『日本ジャズ史』でも読んだことがある。角田はそのなかで当時のドラムの最高の名手に飯山をあげ、父の名を二番手にあげているが、これは多分に好みの問題だろう。父に言わせると飯山は譜面が読めなかったので、クラシックやフルバンドはできなかったが、センスは優れていたという。

『ジャズ批評 Vol.12』には、父は大正後期に大阪のエンパイアホールでプレイしていたとあるが、中学生ほどの年齢である。ジャズがダンスホールで発展したのはアメリカと同じだが、大阪は早くから花月園などのダンスホールがあったことから、当時ジャズは東京よりも大阪の方が進んでいたようだ。

昭和の初め父が東京の楽団に呼ばれたという話は以前から聞いていたが、それはユニオンというダンスホールのバンドのことだった。ある晩「今夜すぐに東京にこい」と言われ、父親や兄には猛反対されたが、もう一人呼ばれたピアノの芝辻健造と一緒に上京した。17才のときだった。

ユニオンをやめたあと幾つかのバンドに所属したが、そのなかの一つにアーネスト・カーイ・ジャズバンドがあった。カーイ、フェルナンデス、菊池滋弥、坂井透といった一流プレイヤーに混じって演奏したことが、とてもよい勉強になったという。ちなみにフェルナンデスは語学の天才で、大阪弁、広島弁などの方言を日本人よりもうまく話したそうだ。

アーネスト・カーイ・ジャズバンドに所属している頃、父は渡辺良のもとに下宿していた。渡辺良はスーザフォンを演奏し、父と一緒にプレイヤーとしてコロムビア・ジャズ・バンドに入った。

コロムビア・ジャズ・バンドは、当時の社長 L.H.ホワイトが一流のプレイヤーを集めて日本一のジャズバンドを作ることを提唱し、昭和4年10月に結成された。その演奏水準は東洋一とも言われた。このとき支給された月給は当時のミュージシャンの中でもずばぬけて高額だったという。

コロムビア・ジャズ・バンドは長期にわたって最高の演奏水準を維持していたが、やが

て昭和 16 年トップの座を松竹軽音楽団に譲ることになる。というのもコロムビア・ジャズ・バンドのなかでも最も優れたプレイヤーが抜けて松竹軽音楽団を作ることになるからだ。その原因は、父の話によると、コロムビア・ジャズ・バンドと言ってもコロムビア専属の楽団で、膨大な数の流行歌のレコード吹込みが演奏の主体を占めたため、ジャズ志向の強いプレイヤーがジャズを演奏できるバンドを作ろうと抜けた。なにしろ田中和男、南里文雄、角田孝、フランシスコ・キーコという超一流メンバーが抜けたのだから、コロムビア・ジャズ・バンドはほとんど壊滅状態に近かったと言うべきだろう。

松竹軽音楽団は昭和 16 年に、上記のメンバーにレイモンド・コンデを加え、渡辺弘を指揮者に迎えて結成された。

昭和 17 年、松竹軽音楽団はフィリピンに軍の慰問に行った。メンバーは最高待遇でマッカーサーが滞在していたホテルに泊まった。マッカーサーはよほど慌てて逃げ出したらしく、ホテルの 8 階にあったマッカーサーの部屋には調度品などがそのまま残っていて、それらを持ってくる者もいたという。

昭和 19 年に東京ローズで知られる NHK 放送に加わるのだが、その前に父は 1 年間ほど、一人で携帯用の木琴を担いで日本中の連隊を呼ばれて回った。当時すでにジャズはもとより、音楽の演奏は禁止された状態にあったから、その点恵まれていたと言える。

しかしなんといっても音楽を、しかも純粋なジャズを堂々と演奏できたのは NHK 放送である。以前『日本ジャズ史』の父の略歴に「NHK 謀略放送に参加」とあるのを見て、何のことが聞いたら「アメリカの音楽を演奏して短波で敵地に流し、ホームシックにして戦意を喪失させるという作戦だ」と言うので思わず吹き出したことがあった。このバンドも松竹軽音楽団のメンバーを中心に編成されたもので、期せずして当時の日本の演奏水準を世界に示すことになった。しかしアメリカ兵が少しも戦意を喪失しなかったことは沖縄戦や東京空襲で実証済みだ。父は謀略放送のアナウンサーをした東京ローズが米軍に逮捕されたので、自分も逮捕されるかもしれないと恐れていたが、日本に進駐してきたアメリカ兵からは「おお、ミスター・タナカ」と握手を求められたという。

これは父の話にはなかったが、『ジャズ批評 Vol.12』によると、終戦の年の 10 月に松竹軽音楽団の元メンバーが東京に集まり、日比谷公会堂で戦後初のジャズコンサートを開いたとある。その中に父が入っていたかどうか定かではないが、もしこのときの録音が残っていたら聴いてみたいものだ。

それから父はスター・ダスターズに所属した。スター・ダスターズでも看板スターだったことは、父自身の証言からも、また写真で見るとスター・ダスターズの看板に「ドラム 田中和男」と書いてあることから明らかである。しかし、まもなく父は何人かのメンバーとともにスター・ダスターズをやめた。それはリーダーの渡辺弘が自身では演奏できないくせに、いろいろ口うるさいことを言っただけという。

そのあと父は自分がバンドリーダーになってゲイ・スターズというバンドを作った。やがて渡辺弘に説得されてスター・ダスターズに戻り、またコロムビア・オーケストラにも

復帰したので、一時に三つのバンドに所属することになった。

その当時、進駐軍相手のバンドには演奏水準によって幾つかの階級があり、スター・ダスターズでは将校相手に演奏し、ゲイ・スターズでは昼間は新橋のダンスホール、夜は兵隊相手に演奏していたという。

強力なスポンサーがつかない限り一流のプレイヤーは集められないらしい。ゲイ・スターズのピアノは母が弾いていた。母は、父のおかげで将校クラブに出入りできたというようなことを言ったことがある。現在は年老いた父も、当時は母にとって偉大なミュージシャンだったのだろう。

ゲイ・スターズの専属歌手は雪村いづみだった。父は雪村いづみをコロムビアに紹介しようと思ったが、その当時コロムビアには同じくらいの年で美空ひばりがいたのでためらっていたら、そのうちビクターに引っ張られた。5、6年前「三時のあなた」というテレビ番組で、雪村いづみの対面相手に父が登場して、雪村いづみが思わず涙を流したのを思い出す。やがて父はゲイ・スターズをやめ、そのあとにフランキー堺が入った。

今日、父から聞いたのはここまでだ。これ以降のことはどんなジャズ史にもものっていないし、今後ものることはないだろう。ようするに歴史から消えたのだ。戦前、戦後を通じて常に最高のバンドのメンバーであった父の写真は、今後出るどんなジャズ史、歌謡史にもものるだろう。しかし父に関する記述はますます減っていくだろう。そしてコロムビア・ジャズ・バンドの、松竹軽音楽団の、スター・ダスターズの写真にのっている父の顔を見て、名前を言える人はやがて一人もいなくなるだろう。

(1977年11月13日日記)